

自然の聖化

John Gatta, *Making Nature Sacred : Literature , Religion, and Environment in America from the Puritans to the Present*

星野 勝利

日本の自然を代表する風景として、華厳の滝や那智の滝が知られる。日光国立公園や吉野熊野国立公園にあるこれらの風景は、富士山や阿蘇山や天の橋立と並んで風景カレンダーの定番である。北米アメリカでこれに相応する滝の風景を探すとすれば、カナダ国境沿いのナイアガラの滝やカリフォルニアのヨセミテ国立公園のブライダルベール・フォールやバーナル・フォールなどの滝の風景が思い浮かぶ。

ヨセミテ国立公園の美しい滝を含む遠景をペーパーバック版の表紙とする本書は、北米アメリカの「自然」について語る書である。「自然」と「文学」と「宗教」と「環境」について語る書である。もちろん「自然」(Nature)といえは、ギリシヤ・ローマの昔から西欧社会を中心にさまざまな形で語られてきた。語り尽くされた感がしないでもない。哲学で語られ、神学で語られ、詩や劇で語られ、天文学や錬金術や医学等でも語られてきた。

時代や場所を北米アメリカに限ってみてもこれは例外ではない。たとえば植民化が進んだ17世紀、William Wood は、*New Englands Prospect* (1634)の中で、Holy Land として訪れた新世界の "nature of the country" について記しているし、19世紀のEmerson は、エッセイ集 *Nature* (1836) で、"this ocean of air above, this ocean of water beneath, this firmament of earth between" について記し、"Nature is the symbol of the spirit" という後世によく知られることばを記した。時代を下って、20世紀後半になると、Nature への関心は environment への関心ともつながり、その結果として ecology や ecosystem に関わる nature writing が文学の新たなジャンルとして生じてくることは、知られる通りである。

本書は北米アメリカにおける「文学」の歴史について語るものである。「文学」が、「自然」を媒体として、「宗教」や「環境」とどのように関わるかを探る書で

ある。とりわけ「宗教」との関わりを中心に探る書である。「自然」と「宗教」の間には、確かに緊密な関係がある。たとえば、華嚴の滝や那智の滝の場合、前者の場合は、「華嚴」という仏典に関わることばから、仏教との関係が想起されるし、後者の場合、高野山と関わる吉野熊野という地理的背景から、同じく仏教との関わりが連想として滲み出てくる。本書が目指すのは、植民地時代から現代に至るまでのアメリカ文学の諸々のテキストを、それぞれいわば一個の華嚴の滝や那智の滝に見立て、これらのテキストが、その背景としてのキリスト教や仏教やユダヤ教とどのような関係を持ち、アフリカン・アメリカンや土着のインディアンの視点とどのように絡み合い、また自然環境という具体的風景の中でどのように存在しているかを追跡する書である。

この追跡は、北米アメリカ植民地時代の文学から現代アメリカ文学へと向けた通時的視点で行われる。本書を構成する10章のテーマは次の通りである。

1. Landfall: The New World as New Creation
2. Meditation on the Creatures in Early American Life
3. Intimations of an Environmental Ethic in the Writings of Jonathan Edwards,
4. "Revelations to US": Green Shoots of Romantic Religion in Antebellum America
5. Variations on Nature: From the Old Manse to the White Whale
6. "Rare and Delectable Places": Thoreau's Imagination of Sacred Space
7. Post-Darwinian Visions of Divine Creation
8. Imagined Worlds: The Lure of Numinous Exoticism
9. Reclaiming the Sacred Commons
10. Learning to Love Creation: The Religious Tenor of Contemporary Ecopoetry

上記10章のうち、はじめの3章は、主として Bradford, Morton, Taylor, Edwards など、植民地時代のピューリタンのテキストを検討の主たる対象としたものであり、4章から6章までは、Emerson, Hawthorne, Thoreau, Melville など、いわゆるロマン派のテキスト分析を対象としたものである。また、7章から9章までは John Muir, Rachel Carson, Barry Lopez, Annie Dillard などに代表

されるいわゆる nature writing の分析が主たる対象であり、最終章は Wendell Berry や Denise Levertov や Gary Snyder などの詩を対象に、これを ecopoetry として解明する試みである。

これらの試みの中で著者が繰り返し指摘するのは、アメリカ文学を特徴づけるものとしての「自然の聖化」(making nature sacred)である。すなわち、新世界の「荒野」(wilderness)を「聖地」(Holy Land)と見るピューリタン以来の伝統的視座が、時代により、あるいは個人により、そこに揺れ動きはあるものの、アメリカ文学の歴史の中では基本的な底流として強力に作動している、という見方である。アメリカの作家の多くが非人間的世界(nonhuman world)としての「自然」に「自然を越えた何か」(something beyond itself) (p.6)を見て取る傾向が顕著であるのはこの伝統の反映であるという見方である。この見方そのものは、特に斬新で目新しいものとは思われない。Perry Miller をはじめとする過去の幾多の研究の中で、繰り返し指摘されてきたところである。本書の特徴は、その分析の包括性であり、また射程の広さである。

具体例として第5章および第6章を眺めると、第5章で著者は、Hawthorne の自然観の特徴をエッセイ "The Old Manse" に見る。庭園の植物への親近感を示すこのエッセイは、著者によると、Hawthorne の女性性を示すものであると同時に、当時の家庭婦人の園芸への傾斜という社会的背景と連動するものである。これはさらに "God Almighty first planted a Garden" (p.107) という Lord Bacon のキリスト教的視点とも結びつくものである。この視点は、詩人 Whitman が都市の風景や人間だけでなく鳥や哺乳動物に対して示す "sacramental vision" や "ecopoetic worldview"(p.110) とも通底するものであるという。一方、Melville の場合、*Moby-Dick* の Ahab 船長に宗教的なものに対する agnosticism や pessimism や skepticism が認められるのは事実である。しかし、Father Mapple の説教に見られる「ヨブ記 (the Book of Job) 」への傾斜は、Melville の姿勢が "nonanthropocentric theology of nature"(p.124) であることを示している。この意味で Melville も Hawthorne や Whitman の仲間となる、というのが著者の視点である。

第6章は Thoreau の *Walden* 論である。著者によるとこの章は、本書全体の「中核」(centerpiece) (p.8) となるべき章である。中核としての本章で著者が論じるのは *Walden* の森という場所が果たす役割である。いまでこそ観光のメッカとなったこの場所は、著者によると Thoreau の「聖性の感覚」(sense of the

sacred) (p.128) がもっとも端的に認められる場所である。すなわちコンコード近郊のこの場所は、Thoreau にとっての “religious exercise” や “sacrament” (p.130) の場である。これは Mircea Eliade が「聖」(sacred) と「俗」(profane) の差異化が行われる場所として指摘した日常的場所から切り離された例外的な「聖なる空間」(sacred space)(p.129) に他ならない。したがって、この空間で Thoreau が行う農耕の試みは “sacred calling”(p.133) の性格を持つものともなる。作品 *Walden* は、この「聖なる空間」を読み解く Thoreau の姿勢を示すものであり、巻末で語られる雪解け時の線路の土手の模様の観察は、その最良の例である。著者によるとこの観察は、Nature を読み解くことそのものであり、その方法は “to approach the nonhuman world as *hieroglyph* (from Greek *hieros*, or sacred, and *glyph*, carving or script) (p.138) である。このような姿勢で試みられる雪解け時の土手の精密な観察は、当時の自然科学や聖書研究の方法論とも関連を持つものであり、19 世紀北米東部アメリカ *Walden* の森に生きた Thoreau の “sacral vision of nature” (p.133) を示すものに他ならないという。

大略以上のような視点から、本書はアメリカ文学と Nature との関係を探る。著者の基本的な視座については特に異論はない。19 世紀の Emerson や Hawthorne や Melville がエッセイや作品の中でしきりに語ったように、遅れてきた世界としての新世界アメリカで父祖の地ヨーロッパの古い文化に対抗できるものは、無限の可能性を内在させた身の回りの広大な Nature でしかなかった。それだけに Nature という場所への思いが人々の意識の中で一段と比重の重いものとなったことは、容易に理解できることである。

「自然の聖化」の視点からアメリカ文学を眺め返す著者は、いまでも毎年 Upstate New York の Lake George の湖畔で夏のひとときを過ごすという。アメリカ人の感性の由来を示唆するものとして、本書が一つの視座を提供してくれることは確かである。

(Oxford University Press, 2004, xii + 291pp.)

(岩手大学教育学部英語教育講座)